

平成30年6月17日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370354

研究課題名(和文) 1800年前後のドイツ文学における「ドッペルゲンガー」形象の生成をめぐる考察

研究課題名(英文) A Study on the Generation of 'Doppelganger' figures in German Literature around 1800

研究代表者

亀井 一 (KAMEI, Hajime)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00242793

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ジャン・パウル、ハインリヒ・フォン・クライスト、E・T・Aホフマンのテキストにおけるドッペルゲンガー＝モチーフを分析することによって、a)このモチーフが、プラウトス以来の伝統的な取り違え劇を継承したものではなかったこと、b)死と復活という神話的なモチーフが、内面化し、反省的な自我イメージになったこと、c)この内面化の過程は、同時代の観念論、ロマン主義美学とならんで、生理学の発展にともなう身体観の変化に連動していることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：An analysis of the doppelganger motifs in the texts of Jean Paul, Heinrich von Kleist, and E. T. A. Hoffmann, reveals the three following points. a) The motifs were not derived from traditional dramas of mistaken identity since the time of Plautus. b) The internalization of the mythical motif of death and resurrection formed an image of a reflective self. c) This internalization process is linked to changes in the perception of the human body that accompanied the development of physiology. It was also influenced by idealism and romantic Aesthetics of the same era.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドッペルゲンガー ジャン・パウル ハインリヒ・フォン・クライスト E・T・Aホフマン 物語論 モチーフ研究 動物磁気術 医学史

1. 研究開始当初の背景

(1) ドッペルゲンガーの出現は、今日、ある種の心理現象として捉えられている。フロイトの精神分析研究がドッペルゲンガー研究の決定的な契機になったことは、オト・ラング(Rang, Otto: 1925)の研究を見ても明らかである。しかし、ドッペルゲンガーを統合失調症の症例として捉えることは、かならずしも文学モチーフとしてのドッペルゲンガーを理解することにつながらない。また、1800年前後の文学テキストに、100年後に成立した精神分析研究をそのまま適用すれば、その時代に特有な状況が見落とされることになりかねない。

(2) 文学モチーフとしてのドッペルゲンガーをテーマにした先行研究には、ドッペルゲンガー形象を網羅的に調査したものがある(Bär, Gerald: 2005; Forderer, Christof: 1999)。しかし、いずれもモチーフの生成を明らかにしているとは言えない。

(3) キトラー(Kittler, Friedrich: 1985)は、メディア論的観点から、ドッペルゲンガー形象の起源を「書く主体」に求める。キトラーが目指すのは、ジャン・パウルの小説でも、クライストの戯曲でもなく、1828年クリスマスに、シャミッソーが窓の外から、書齋に座っている自分を見たという体験談である。キトラー論文は、1800年前後におけるドッペルゲンガー形象の変容を暗示しているという意味で示唆的であるが、「書く主体」との関連が十分に解明されているとは言えない。

2. 研究の目的

(1) 「ドッペルゲンガー」という言葉が文学テキストに現れるようになる1800年前後を中心に、ドッペルゲンガー=モチーフの生成過程を追究し、自我 = 書く主体 = 社会 の関係を明らかにする。

(2) 1800年前後のドイツ文学におけるドッペルゲンガー形象の特徴を分析し、この時代以前の類似モチーフ(取り違え喜劇)との差異を明らかにする。

(3) ドッペルゲンガー形象を考察することによって、同時代の人間学についての理解を深める。

(4) ドッペルゲンガー=モチーフという観点から、市民社会成立期における私的領域の役割を再検討する。

3. 研究の方法

(1) 分析対象としては、「ドッペルゲンガー」という語の初出とされるジャン・パウルの『ジーベンケース』のほか、E・T・A ホフマン、ハインリヒ・フォン・クライスト、ク

リンガーのテキストをとりあげる。特に、『ジーベンケース』については、初版(1796)と第二版(1818)を区別し、二つのテキストの差異に留意する。

(2) 1800年代の生理学、経験心理学、動物磁気説を調査する。

(3) 同時代の文学テキストにおける一人称語り手という観点から、ドッペルゲンガー=モチーフと「書く主体」の関連を考察する。

(4) 近年のメディア論の成果を取り入れる。また、コショルケ(Koschorke, Albrecht: 1999)の論考を参照しつつ、1970年代から80年代初頭にかけて大きな成果を収めた社会学的観点からのジャン・パウルの研究を援用する。

4. 研究成果

(1) 「ドッペルゲンガー」は、伝統的な取り違え喜劇に登場する「双子」を引き継いで成立した形象ではない。ドッペルゲンガー形象は、死と復活というテーマの下で生まれた。このことは、「ドッペルゲンガー」という語の初出とされるジャン・パウルの『ジーベンケース』(1796)の成立史からも裏付けられる。

(2) ドッペルゲンガー形象は、成立当初から自我イメージだったわけではない。『ジーベンケース』初版(1796)において、主人公のドッペルゲンガー、ジーベンケースとライブゲーバーは、友情のアレゴリー(双子座神話)として登場する。そこに自己反省的な意味が付け加えられるのは、第二版(1818)においてである。自分を見るというモチーフそのものは、最初期の小説草稿(1790)にすでに現れている。この草稿で、作者が自分の死んだ姿を幻視していることを考えると、復活を演じる『ジーベンケース』のドッペルゲンガーはその対極のイメージであると言える。ドッペルゲンガー=モチーフが自己反省的なテーマに重ねられるのは、つづいて発表された長編小説『巨人』(1800/03)、フィヒテ哲学の「絶対自我」概念を諷刺した『フィヒテ哲学の鍵』(1800)においてである。第二版が歴史的批判版『ジーベンケース』の底本となったこと、さらに、自我イメージとしてのドッペルゲンガーを鮮烈に描き出したE・T・A ホフマンの影響により、ドッペルゲンガーの起源は忘れ去られた。

(3) ドッペルゲンガーとは、生き写しの二者なのか、もう一人を見た者なのか。ドッペルゲンガーの定義の揺れを指摘したのは、フォルデラーだった。本研究では、誰がドッペルゲンガーなのか、ではなく、誰に対してドッペルゲンガーが現れるのか、という問い

を立てることによって、ドッペルゲンガー形象の変質を追跡した。

伝統的な取り違え劇では、第三者に対して、生き写しの二人が現れる(三人称ドッペルゲンガー)。E・T・A ホフマン『悪魔の霊液』(1815/16)でドッペルゲンガーは、自分自身として主人公メダルドゥスに対して現れる(再帰的ドッペルゲンガー)。この二つのケースが、内面化の過程の両極に位置するとすれば、『ジーベンケース』初版(1796)、クライスト『アンフィトリオン』(1803年成立)は、その中間に位置づけることができる。前者におけるドッペルゲンガーが、相手を自分と同じ者とみなしつつ、互いに独立した人格として存在しているのに対して、後者において、ユピターはただ、像としてアンフィトリオンのドッペルゲンガーになっているにすぎない。クライストは、生き写しの二人の対決から、二人を取り違えるアルクメーネの自己省察へと葛藤の焦点を移すことによって、伝統的モチーフを内面化している。

(4) 誰に対して現れるのか、という観点からは、語りの視点に合わせて考察することができる。『フィヒテ哲学の鍵』は、ライブゲバーによる「手記」という形をとっている。「手記」作者のライブゲバーに現れる自我は、「絶対自我」という再帰的ドッペルゲンガーであると同時に、「手記」を書いている自我でもある。『悪魔の霊液』の場合も、物語の大半が、主人公によって書き記された「手記」という枠の中で語られる。主人公に起こった出来事が、自身の視点から語られるので、出来事そのものが、現実には起こっているのか、あるいは、主人公の幻覚なのか判然としない。作者ホフマンは、再帰的ドッペルゲンガーを一人称視点から語ることによって、ドッペルゲンガーの出現を心理的な現象として再現している。

(5) 晩年のエッセー『有機的磁気術のいくつかの奇跡についての推測』(1814)で、ジャン・パウルは、人間の魂は、肉体とは別に、目に見えない「エーテル身体」を纏っているとし、磁気術の諸現象を説明している。「エーテル身体」は、肉体と魂、魂と魂を繋ぐ有機的な組織であり、死によって肉体が破壊された後に、魂はこの身体を纏って蘇るとされる。ジャン・パウルのドッペルゲンガー形象が、死と復活のテーマの下に生じたことを考えるならば、「エーテル身体」を、もう一人のわたしとして、その延長に位置づけることができる。

(6) 「エーテル身体」は、ホフマンのドッペルゲンガーがそうであるように、肉感が希薄である。エーテルは、限りなく細かい「不可量物」(Imponderabilien)であり、精神と物質を媒介すると言われる。「エーテル身体」

は、魂のまわりをぼんやりと取り巻いて、外界へと溶け込んでいく。このようなイメージは、同時代の生理学における人間像に対応している。人間は、体液によって調整される個体というよりも、少なくとも肉体的な部分については、神経組織によって制御される機械として捉えられるようになった。磁気やエーテルが注目されたのも、神経組織における情報の交換が、微小物質の流れとして表象されたためである。

(7) 公的領域が、魂という私的な領域に侵入してきたとき、ドッペルゲンガーが出現したのではないか。これは、本研究の当初計画で示した仮説の一つだったが、明確な裏付けをとることができなかった。そのような留保のもとではあるが、この関連で、ジャン・パウルが、磁気化された人々の間に生じる魂と魂の交流に、作者と読者の関係を類比的に重ね合わせていることは、注目に値する。18世紀後半、急速に拡大した書籍流通が、「公的」議論を促したことはよく知られている。一方、文学、心理学の発展にともなって、私的な領域もこれまでにないほど拡大、深化が進んだのだ。作者は、相反する方向に拡大する二つの領域の両方に深くかかわっていた。二つの領域の緊張が高まり、作者の自己意識が明確になってきたのが、『ジーベンケース』第一版の出た1796年から『悪魔の霊液』の出た1816年のおよそ20年間だったということなのかもしれない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

亀井一、ドッペルゲンガーとエーテル身体 ジャン・パウルの二つの身体イメージをめぐって、ドイツ文学論叢(阪神ドイツ文学会) 査読有、59巻、2018、5-22

亀井一、1800年前後のドッペルゲンガーモチーフについて(第111報) ハインリヒ・フォン・クライスト『アンフィトリオン』、大阪教育大学紀要、査読無、66巻(人文社会科学・自然科学) 2018、21-32、<https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD00030551>

亀井一、双子座と幻影 ジャン・パウルとE・T・Aホフマンのテキストにおけるドッペルゲンガーの諸相、ドイツ文学研究(日本独文学会東海支部) 査読有、48号、2016、19-30

亀井一、神経と魂 エルンスト・ブラトナーとジャン・パウル、大阪教

育大学紀要、査読無、64 巻 2 号(I 人文科学) 2016、21-32
<https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD00028745>

亀井一、1800年前後のドッペルゲンガーモチーフについて (第II報) ジャン・パウルとE・T・Aホフマン、大阪教育大学紀要、査読無、64 巻 1 号(I 人文科学) 2015、33-45
<https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD00028617>

亀井一、1800年前後のドッペルゲンガーモチーフについて (第I報) ジャン・パウルのテキストにおける「死」と「わたし」、大阪教育大学紀要、査読無、63 巻 1 号(I 人文科学) 2014、1-16
<https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD00027987>

〔学会発表〕(計 1 件)

亀井一、ドッペルゲンガーとエーテル身体 動物磁気をめぐるジャン・パウルの『推測』について、日本ヘルダー学会、2016

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kamei/doppelgaenger.html>

アウトリーチ活動

亀井一、1800年前後のドイツ文学における「ドッペルゲンガー」形象の生成をめぐる考察、大阪教育大学研究成果発表会、2014

亀井一、ドイツ文学における主人公と従者の物語、大阪教育大学研究成果発表会、2015

亀井一、ドイツ恋愛小説における問題の<三人目>、大阪教育大学研究成果発表会、2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

亀井 一 (KAMEI, Hajime)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00242793